といふ語こもれり、又ヒユといふ語をこめたり、これらの事は、注するにも及ぶべからざれど、ナツといひ、フユといふ、アツといひ、ヒユといふ義也といふ事、意得ぬ事也といふ人もこそあれと思へば、事煩しけれど、こゝに注しぬるなり、

〔古今要覽稿時令〕春　春は張なり、事々物々皆はりいづる義なり、故に春則重播種子（シキマキシ）と日本書紀いふ、その苗の出る時節なれば、種子をまきしなり、是春といふ名目のみえし始なり、〔略〕中梓弓春と萬葉集いひ、又春張乍（ハルハルナガラ）と同上いひ、木のめもはるの雪ふればと古今集いひ、又このめはる雨、衣はるさめなど、歌によみつゞくるも、みな張發する義にとれり、天地人の三才を以ていへば、天にありては、春は日光發陽して日を追てのどかなる、是陽氣ましくはゝるも、はりみてる意なり、春立初る日より、天もかすみ渡りて、舊冬のみじかき日も、次第にのびはり、地にありては、草木根株をのづから地中より、地上に萌芽はり出るなり、人の上にていへば、人意も草木の芽はりいづるが如くに、立春の朝より、氣をのづからのびらかにして、人氣をのづから發陽し、心いさましくおもはるゝ、皆はるといふ訓意にかなふなり、春夏秋冬の訓義、或は時節にとり、或は寒暑の氣にとり、或は方角にとり、或は五行にあて、或は五色の色に配當するあり、或は十幹にあて、或は天名あり、いはゆる春爲蒼天と爾雅いふ是なり、

〔日本書紀一神代〕天照太神、以天狹田長田爲御田、時素戔嗚尊、春則重播種子、〔略〕註且毀其畔、〔略〕註秋則放天班駒使伏田中、

〔日本書紀十六武烈〕十一年〔仁賢〕八月、〔略〕中戮鮪臣於乃樂山、是時影媛〔略〕中作歌曰、〔略〕中播屢比能、箇須我鳴須擬、逗摩御暮屢、鳴佐哀鳴須擬、〔略〕下

〔萬葉集九雜歌〕鷺坂作歌一首

山代、久世乃鷺坂、自神代、春者張乍、秋者散來、